

令和6年度 学校経営計画に対する自己評価計画書

石川県立門前高等学校

重点目標 1 「門前町・總持寺通り商店街の復興」をテーマとした3年間の系統的探究活動に取り組むことで、教員・生徒が学習や部活動時の下支えとなる「探究力」を育成する。

個別目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定	分析（成果と課題）及び今後の対応策	備考													
・地域復興に貢献する資質・態度の育成	・復興をテーマとした「総合的な探究の時間」の充実 ・復興に向けた地域との連携	教務課 各学年	・探究活動を通して、関係機関と連携し、門前地域特有の歴史や文化を学び、この地域の強みを理解することで、地域の復興に貢献しようとする主体的態度を育成する。  ・フィールドワークを通して、現状やニーズを知り、門高生だからできるハード・ソフト両面からの復興支援を提案し、実践する力を身に付ける必要がある。	<b>【成果指標】（教員）</b> 探究活動を通して、地域復興について具体的な考えを発信させることができた。	「探究活動を通して、地域復興について具体的な考えを発信させることができた」と評価した教員の割合 (①+②) が  A 80%以上 B 70%以上 C 70%未満	<table border="1"> <tr><td>①</td><td>できた</td><td>25%</td></tr> <tr><td>②</td><td>概ねできた</td><td>50%</td></tr> <tr><td>③</td><td>余りできなかった</td><td>25%</td></tr> <tr><td>④</td><td>全くできなかった</td><td>0%</td></tr> </table>	①	できた	25%	②	概ねできた	50%	③	余りできなかった	25%	④	全くできなかった	0%	B  75%	<b>【分析】</b> 80%には届かなかったものの、中間報告時から大きく伸ばしている。教員一人一人が自分たちに何が出来るかを考え、生徒と共に取り組んだ成果だといえる。 <b>【今後の対応】</b> 引き続き、活動を継続し、引き継ぐべきものは引き継ぎ、改善すべきは改善し、よりよい活動にしていく必要がある。	教員対象調査 (7、12月)
				①	できた	25%															
②	概ねできた	50%																			
③	余りできなかった	25%																			
④	全くできなかった	0%																			
<b>【成果指標】（生徒）</b> 探究活動を通して、地域復興について具体的な考えを発信することで、将来、同じ体験をすることがあった際につなげることができた。	「探究活動を通して、地域復興について具体的な考えを発信することで、将来、同じ体験をすることがあった際につなげることができた」と評価した生徒の割合 (①+②) が  A 80%以上 B 70%以上 C 70%未満	<table border="1"> <tr><td>①</td><td>できた</td><td>76%</td></tr> <tr><td>②</td><td>概ねできた</td><td>24%</td></tr> <tr><td>③</td><td>余りできなかった</td><td>0%</td></tr> <tr><td>④</td><td>全くできなかった</td><td>0%</td></tr> </table>	①	できた	76%	②	概ねできた	24%	③	余りできなかった	0%	④	全くできなかった	0%	A  100%	<b>【分析】</b> 様々な活動を通して、街の人と触れ合い、地域の現状を知り、それぞれの方法で地域貢献について発信することができた。 <b>【今後の対応】</b> これまでの活動を継続しながらも、さらに課題を発見し探究活動を深め、発信していく必要がある。	生徒対象調査 (7、12月)				
①	できた	76%																			
②	概ねできた	24%																			
③	余りできなかった	0%																			
④	全くできなかった	0%																			
・ボランティア活動による地域・他者貢献意識の高揚	・總持寺参道清掃 ・地域ボランティアへの参加 ・年賀状作成 ・各種地域行事への参加	総務課 生徒会 各学年	・地域のボランティア活動やイベントに積極的に協力することで、他者や地域貢献の精神を涵養する。	<b>【満足度指標】（生徒）</b> 参道清掃や被災地域でのボランティア活動への参加等を通して、「地域貢献の心」「被災者への思いやりの心」「協働する心」が育った。	「参道清掃や被災地域でのボランティア活動への参加等を通して、「地域貢献の心」「被災者への思いやりの心」「協働する心」が育った」と答えた生徒の割合 (①+②) が  A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	<table border="1"> <tr><td>①</td><td>できた</td><td>87%</td></tr> <tr><td>②</td><td>だいたいできた</td><td>13%</td></tr> <tr><td>③</td><td>余りできていない</td><td>0%</td></tr> <tr><td>④</td><td>全くできていない</td><td>0%</td></tr> </table>	①	できた	87%	②	だいたいできた	13%	③	余りできていない	0%	④	全くできていない	0%	A  100%	<b>【分析】</b> 「総合的な探究の時間」において、多くの生徒が地域に関わったことや「門前マルシェ」等の多くの地域行事に参加したこと、意識が高まった。 <b>【今後の取組】</b> 次年度も復興の一端を担えるように積極的にボランティア活動や地域行事に参加できるようにしていく。	生徒対象調査 (7、12月)
①	できた	87%																			
②	だいたいできた	13%																			
③	余りできていない	0%																			
④	全くできていない	0%																			
<b>学校関係者評価委員会の評価</b>	探究活動等での商店街との連携した活動については今後も継続してほしい。また、生徒が地域復興の取り組みに積極的に参加してくれるとありがたい。																				
<b>評価結果を踏まえた今後の改善策</b>	3年間の高校生活を通じて、地域に愛着を持ち、地域に貢献できるような生徒を育てていく。次年度も復興の一端を担うために、生徒が積極的にボランティア活動や地域行事に参加できるよう、学校側の制度も整えていく。																				

重点目標2 GIGAスクール構想をとおして、低学年次より個別最適な学びに取り組ませながら、両コースの特性の充実と資格取得と学力向上を図り、卒業後の生徒の多様な進路実現につなげる。

個別目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定	分析（成果と課題）及び今後の対応策	備考			
・低学年次から、一人1台端末やタブレット等の教育ICT環境を活用した反転学習に取り組み、「個別最適な学び」の充実による学力の向上を目指す	<b>【両コース共通】</b> ・家庭学習を前提とした反転授業 ・習熟度別授業 ・朝学習 ・放課後補習 ・個別指導  <b>【普通コース】</b> ・模試の振り返り <b>【キャリアコース】</b> ・各種資格取得	進路指導課 教務課 GIGA校内推進リーダー 各学年 各教科	・家庭学習習慣が定着できておらず、学習内容の定着が十分にできていない。  ・教員のICT(端末機)を用いた反転授業への取り組み率が低い。  ・主に大学進学を目指す生徒へ個に応じた学習指導力の向上が求められている。	<b>【成果指標】</b> （生徒） 普通コース：学習支援ソフトを取り入れた反転学習により、模試の成績が伸びた。	普通コース：模試の年度始めと年度末の学力レベルの値を比較し、成績が上昇した生徒数の割合で評価する <b>【1年生】</b> 3教科(国・数・英)のGTZ値 対象：4月スタディーサポートと1月進研模試 <b>【2年生】</b> 5教科(国・数・英・理・社)のGTZ値 対象：4月スタディーサポートと1月進研模試(国・数・英)、10月進研模試と1月進研模試(理・社) A 70%以上 B 60%以上 C 60%未満	B	<b>【分析】</b> GTZの値が向上した生徒の割合が全体の61%であったが、大きく伸びた生徒の割合は少ない。顕著な成績の低下はあまり見られないが、現状維持の生徒の割合が多く、集団としての学習意欲の向上が課題である。 <b>【今後の対応】</b> 進路ガイダンス等で生徒自身が学習の必要性を自覚できるよう、内容の見直しを行っていく。教員には模試分析の徹底を呼びかけ、指導の改善に繋げていく。	対外模試結果			
				<b>【成果指標】</b> （生徒） キャリアコース：各種検定試験に合格できた。	キャリアコース：各種検定試験（各種商業科検定・福祉科資格等）の合格者数の割合で評価する A 80%以上 B 70%以上 C 70%未満				A	<b>【分析】</b> 日頃からの一人一台端末の活用によるタイピングスキルの上昇なども、合格者数の増加につながったと考えられる。検定試験の上級試験に対する受検者数も増加しており、資格取得への意識も向上させることができています。 <b>【今後の対応】</b> 検定試験の上級試験に合格できる力を伸ばしていくことが求められるため、学習用ツールの活用など、一人一台端末の良さを十分に活かせる方法などを教科担当の教員とともに見定めていく。進路講話などから、生徒に検定資格の取得をさらに促すようにするなど、受検意欲を高められる機会を増やしていく。	各種検定試験結果
・生徒の思考力・判断力・表現力の向上	・門高読書タイムや図書館講座の実施	教務課	・読書活動を通して生徒の思考力・表現力・判断力の下支えとなる力を養成する必要がある。	<b>【成果指標】</b> （生徒） 「読書タイム」で読んだ本についての感想や考えをアウトプットすることができた。	「読書を通じて自分の感想や考えをアウトプットすることで、思考力や表現力が高まった」と答えた生徒の割合(①+②)が A 80%以上 B 70%以上 C 70%未満	A	<b>【分析】</b> 読書タイム直後にアンケートを実施したことで思考したり、感動したことなどを意欲的に表現したことが結果からわかる。 <b>【今後の対応】</b> 取り組み方を工夫することで、思考力や判断力が高まったので、更に深まっていくように今後も工夫していきたい。	生徒対象調査(7,12月)			
・読書活動を通して自分の感想や考えをアウトプットすることができた。	A 80%以上 B 70%以上 C 70%未満	① 高まった 73% ② 概ね高まった 25% ③ 余り高まらなかった 2% ④ 全く高まらなかった 0%									
・進路意識の醸成と早期確立	・外部講師によるキャリア教育講演会 ・ふるさと事業 ・企業人インタビューDVDの活用 ・インターンシップ ・進路ガイダンス ・進路学習 ・出張オープンキャンパス ・地元企業見学会 ・アントレプレナーシップ事業	進路指導課 各学年	・働くことの意味や自分の適性を理解し、将来の進路設計を立てる力を早期より養成する必要がある。	<b>【成果指標】</b> （生徒） 自分の適性を十分に把握し、将来の進路について話すことができたようになった。	「自分の適性を十分に把握し、将来の進路について話すことができたようになった」と評価した生徒の割合(①+②)が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満				A	<b>【分析】</b> 進路希望調査実施に合わせて進路ガイダンスや進路行事を行うなど、各学年毎に適した時期で進路について深く考える機会を持つことができ、自分の将来と照らし合わせて進路について話すことができたようになった生徒の割合が増えた。 <b>【今後の対応】</b> 約1割の生徒が、進路に関して見通しを持つことができずに悩んでいることが伺える。担任との面談内容を学年進路担当が主となって課と共有し、進路指導課として個に応じた進路の選択肢を提案する機会を設けるなど、自分の将来と向き合う機会の増加を図っていく。	生徒対象調査(7,12月)
・働くことの意味や自分の適性を理解し、将来の進路設計を立てる力を早期より養成する必要がある。	A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	① できるようになった 58% ② だいたいできるようになった 30% ③ ほとんどできない 12% ④ 全くできない 0%									
学校関係者評価委員会の評価		学力や進路希望が多様な生徒に応じた指導によって生徒の能力を引き出し、可能性が広がるような様々な取り組みを今後も続けてほしい。									
評価結果を踏まえた今後の改善策		進路行事に向けた事前学習などにより、自身と照らし合わせて考える機会を増やし、進路意識の向上を目指す。また、模試分析等により、生徒一人一人に合った個別指導を提供し、進路実現に求められる学力の向上へとつなげる。									

重点目標3 「危機管理マニュアル」の見直しを図り、教員・生徒が非常時に適切な行動ができる資質・能力を高め、減災につなげる。また、生徒が安心して学校生活を送れるよう安全管理を徹底する。

個別目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定	分析（成果と課題）及び今後の対応策	備考													
・各種有事に即した危機管理マニュアルによる、生徒・教員の安全の確保	・有事に即した危機管理マニュアルの見直し ・減災につながる、大規模地震を想定した訓練の実施 ・特別支援学校との合同訓練 ・減災の観点による、施設の復旧状況に応じた避難経路の更新 ・訓練後の振り返りの実施 ・生徒の危機管理意識の啓発	総務課	・今回の震災により、危機管理マニュアルが有事に即した内容とは言い難いことが判明した。 ・生徒、教職員の有事の際の危機管理意識が乏しい。	<b>【成果指標】（教員）</b> 有事の際、生徒・職員の安全を確保する術を身につけており、減災につなげる行動ができる。	「有事の際、生徒・職員の安全を確保する術を身につけており、減災につなげる行動ができる」と答えた教員の割合(①+②)が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	<table border="1"> <tr><td>①</td><td>できる</td><td>41%</td></tr> <tr><td>②</td><td>概ねできる</td><td>59%</td></tr> <tr><td>③</td><td>余りできない</td><td>0%</td></tr> <tr><td>④</td><td>全くできない</td><td>0%</td></tr> </table>	①	できる	41%	②	概ねできる	59%	③	余りできない	0%	④	全くできない	0%	A 100%	<b>【分析】</b> ねらいを持った訓練の実施や、「減災」に向けたアンケートを行った結果、7月の調査に比べ、「できる」の割合が2割近く増加した。 <b>【今後の対応】</b> 「概ねできる」と答えた職員に対して、研修等を行い、対応力向上を図る。また、使用する施設が公民館・仮設校舎へと変わっていくので、臨機応変な対応ができるように工夫して訓練を行う。	教員対象調査 (7, 12月)
				①	できる	41%															
②	概ねできる	59%																			
③	余りできない	0%																			
④	全くできない	0%																			
<b>【成果指標】（生徒）</b> 有事の際、安全を確保する術を身につけており、減災につなげる行動ができる。	「有事の際、安全を確保する術を身につけており、減災につなげる行動ができる」と答えた生徒の割合(①+②)が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	<table border="1"> <tr><td>①</td><td>できる</td><td>75%</td></tr> <tr><td>②</td><td>概ねできる</td><td>25%</td></tr> <tr><td>③</td><td>余りできない</td><td>0%</td></tr> <tr><td>④</td><td>全くできない</td><td>0%</td></tr> </table>	①	できる	75%	②	概ねできる	25%	③	余りできない	0%	④	全くできない	0%	A 100%	<b>【分析】</b> ねらいを持った訓練の実施や、災害伝言ダイヤルの体験、アンケートの継続などを行った結果、昨年度の同時期の調査や7月調査と比較して「できる」の割合が大きく増加した。 <b>【今後の対応】</b> 今後も大きな地震が起こる可能性があるため、継続的に訓練を実施する。「減災」に向けたアンケートも継続的に実施し、災害に対する意識が下がらないようにする。	生徒対象調査 (7, 12月)				
①	できる	75%																			
②	概ねできる	25%																			
③	余りできない	0%																			
④	全くできない	0%																			
・各種有事を意識した定期的な安全点検	・防災の観点による日常の安全点検の実施 ・定期的な安全点検の実施（毎学期） ・有事後の安全点検の実施	保健指導課	・このたびの震災で学校施設の破損が生じていることから、きめ細やかな安全点検を実施し、生徒・職員の安全確保に努めていく必要がある。	<b>【成果指標】（教員）</b> 安全管理への意識を高め、日常・定期・有事の安全点検を確実に実施することができる。	「日常・定期・有事の際の安全点検を、きめ細やかな視点を持って実施することができる」と答えた教員の割合(①+②)が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	<table border="1"> <tr><td>①</td><td>できる</td><td>47%</td></tr> <tr><td>②</td><td>概ねできる</td><td>53%</td></tr> <tr><td>③</td><td>余りできない</td><td>0%</td></tr> <tr><td>④</td><td>全くできない</td><td>0%</td></tr> </table>	①	できる	47%	②	概ねできる	53%	③	余りできない	0%	④	全くできない	0%	A 100%	<b>【分析】</b> 7月調査時よりも「できる」の回答が増加している。機会があるごとに情報発信をしてきたので、職員の意識も知識も高まったと考えられる。 <b>【今後の対応】</b> 「できる」の回答がまだ半分も満たないので、引き続き情報発信を行い、講座ではなるべく少人数のグループでの活動の場を作り理解を深めていく。	教員対象調査 (7, 12月)
①	できる	47%																			
②	概ねできる	53%																			
③	余りできない	0%																			
④	全くできない	0%																			
<b>学校関係者評価委員会の評価</b>																					
<b>評価結果を踏まえた今後の改善策</b>																					
能登半島地震や豪雨災害での教訓を活かして、危機管理体制の充実を図ってほしい。また、今回の公民館移転や仮設校舎移転時と学習環境が変化する中で、有事の際の対応力の向上を目指してほしい。																					
今年度実施した生徒・職員対象の「減災のためのアンケート」の継続や災害ボランティア、災害支援活動を実施することで災害に対する意識低下防止を図る。環境が変化する中で、臨機応変な対応ができるように工夫して訓練を実施する。																					

重点目標4 組織的・協働的に目標管理型校務運営による業務改善を進め、ワークライフバランスと教育活動の両立を実践する。

個別目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定	分析（成果と課題）及び今後の対応策	備考													
・目標管理型の校務運営による、効率的・戦略的分掌業務の成果目標達成	・左記の目標達成に向けて、到達度を数値で測り、仕事の質を向上させる	各課 各学年	・目標達成度が曖昧なため、分析が緩く、対策が不明瞭である。	<b>【成果指標】（教員）</b> 目標管理型の校務運営によって、数値目標達成に努めることで、個々の教科指導、分掌・学年業務の資質・能力を高めることができた。	「目標管理型の校務運営によって、数値目標達成に努めることで、個々の教科指導、分掌・学年業務の資質・能力を高めることができた」と答えた教員の割合(①+②)が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	<table border="1"> <tr><td>①</td><td>できた</td><td>35%</td></tr> <tr><td>②</td><td>概ねできた</td><td>53%</td></tr> <tr><td>③</td><td>余りできていない</td><td>12%</td></tr> <tr><td>④</td><td>全くできていない</td><td>0%</td></tr> </table>	①	できた	35%	②	概ねできた	53%	③	余りできていない	12%	④	全くできていない	0%	A 88%	<b>【分析】</b> 昨年度と今年度の7月の調査では、「できた」の割合が低かったが、継続した取組によってつながりを持った業務を行えるようになってきている。 <b>【今後の対応】</b> 各課で業務の見直しを継続して行い、出てきた課題を来年度以降につなげていけるように学校全体で取り組んでいく。	教員対象調査 (7, 12月)
①	できた	35%																			
②	概ねできた	53%																			
③	余りできていない	12%																			
④	全くできていない	0%																			
・教員の働き方改革の推進	・最終退校時刻の遵守 ・定時退校日の個人設定（各月1日） ・業務振り返りシートの作成	全教員	・ワークライフバランスの重要性を理解して、退校時間を意識した業務推進を更に徹底する必要がある。	<b>【成果指標】（教員）</b> なぜ最終退校時間を遵守するのかを理解し、各分掌・学年・教科の優先順位をつけて計画的かつ効率的に校務を行っている。	「なぜ最終退校時間を遵守するのかを理解し、優先順位をつけて計画的かつ効率的に校務を行っている」と答えた教員の割合(①+②)が A 85%以上 B 75%以上 C 65%以上 D 65%未満	<table border="1"> <tr><td>①</td><td>行っている</td><td>41%</td></tr> <tr><td>②</td><td>概ね行っている</td><td>41%</td></tr> <tr><td>③</td><td>余り行っていない</td><td>18%</td></tr> <tr><td>④</td><td>全く行っていない</td><td>0%</td></tr> </table>	①	行っている	41%	②	概ね行っている	41%	③	余り行っていない	18%	④	全く行っていない	0%	B 82%	<b>【分析】</b> 今年度の目標達成の目処が立ち、校務全体にも見通しが持てるようになってきたので、ほとんどの教員が時間外在校等時間が月平均4.5時間以内に収まっている。 <b>【今後の対応】</b> 分掌内での連携、協働を推進し、チームで働き方改革を進めていく意識を定着していく。	教員対象調査 (7, 12月)
①	行っている	41%																			
②	概ね行っている	41%																			
③	余り行っていない	18%																			
④	全く行っていない	0%																			
<b>学校関係者評価委員会の評価</b>																					
震災対応、公民館への移転など多忙であると思うが、取組を継続させて、指導が更に充実するようしてほしい。																					
<b>評価結果を踏まえた今後の改善策</b>																					
目標管理型の校務運営が定着し、教職員の意識にも変化が成果に表れていると考えている。また、校務を組織的に実行する体制を構築し、さらなる時間外勤務時間の減少を図る。																					

重点目標5 「震災後のこころのケア研修」等の教育相談的研修等をととして、教員の「相手の気持ちを押し量る力」を高め、生徒理解力、教育相談力向上につなげる。

個別目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定	分析（成果と課題）及び今後の対応策	備考		
・いじめの早期発見・ 早期対応	・いじめに関する校内研修 ・生徒観察、生徒との人間関係づく りによる早期発見・早期対応 ・いじめ調査の実施	生徒相談課	・「いじめは起こりえるもの」 の意識を教員が常に持ち、未 然防止に尽力する。	【成果指標】（教員） 研修会等がいじめ問題について理 解を深め、予防的な生徒指導に結 び付けている。	「研修会等によって、いじめ問題について理解を深 め、予防的な生徒指導に生かしている」と答えた教員の 割合（①+②）が  A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	① 生かしている 41%	B  88%	【分析】 中間評価時の「概ね生かしている」7 2%が、最終では47%となり、その分 「生かしている」が28%から41%に 上がったが、逆に「あまり生かしてい ない」が0%から12%に増加した。い じめの認知件数は0であるが、自他を尊重 しより良い関わり合いを持つことに関し ては課題の多い1年であった。そのこと が結果に表れていると考えられる。 【今後の対応】 特に、未然防止の観点、早期発見・対応 について、教員間で目線合わせをし、協 働を常に心がけて生徒対応をしていける よう、年間の見通しを持った提案を心掛 け、丁寧に説明して実践にあたってい く。	教員対象調査 (7, 12月)	
						② 概ね生かしている 47%				
						③ 余り生かしていない 12%				
						④ 全く生かしていない 0%				
・被災した生徒の心理 的ケアを行い、安心 して学校生活を送る	・「震災後のこころのケア研修」等 の教育相談的研修への参加  ・「気づき票」の活用  ・個人面談の実施 (担任・学年・相談担当・SC等)	生徒相談課	・震災による心理的影響の程度 に大きな差がある	【成果指標】（教員） 「震災後のこころのケア研修」等 の研修によるスキル向上に努め、 生徒の心に寄り添う、きめ細やかな 対応をしている。	「震災後のこころのケア研修」等の研修によるスキル 向上に努め、生徒の心に寄り添う、きめ細やかな対応 をしている。」と答えた教員の割合（①+②）が  A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	① している 65%	A  100%	【分析】 中間と比較し、「している」の割合は2 倍に増加した。しかし、これで十分と思 わず、継続していくことが大切である。 【今後の対応】 心のケア研修や生徒対象の心のアンケ ート、毎月の「気づき票」で生徒の心の状 態をつかみ、共感的に対応していくこと を心掛けてきた。ゴールの無い取組み ではあるが、生徒の声に耳を傾け、生徒 と共により良い環境や互いの関わりを築 き上げていく姿勢を今後も持ち続け指導 にあたりたい。	教員対象調査 (7, 12月)	
						② 概ねしている 35%				
						③ 余りしていない 0%				
						④ 全くしていない 0%				
・多様な生徒に対応で きる教員の教育相談 的資質能力を高める	・「気づき票」の活用 ・個人面談の実施 (担任・学年・相談担当・SC等) ・校内研修会 (毎月の職員会議におけるケー ス会) (夏期休業中のSCによる研修)	生徒相談課	・組織的対応のための情報共有 をより確実にすること、教師 の深い生徒理解に基づく配 慮・相談支援体制の構築と実 践が急務である。  ・若手教員を中心に、多様な生 徒に対応できる教育相談的資 質能力を高める必要がある。	【成果指標】（生徒） 1人ひとりの教員が、生徒の困り 感を察知し、適切な声かけや親身 になって相談に応じてくれるな ど、安心して学校に通うことが できている。	「1人ひとりの教員が、生徒の困り感を察知し、適切な声 かけや親身になって相談に応じてくれるなど、安心して学 校に通うことができている。」と答えた生徒の割合が(①+ ②)が  A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	① できている 75%	A  99%	【分析】 中間評価時の「余りできていない」6名 が最終では1名に減少し、「できてい る」と回答した生徒も55人から75人 に増えてはいるが、その1人の声を聞く 術を考えていかねばならない。 (昨年度比でも全体としては、「できて いる」が25%増加) 【今後の対応】 いじめアンケートで生徒の声を聞いた。 「先生と1対1で話す機会を作って欲 しい」という意見があった。来年度は、面 談週間に、全職員で生徒と話す機会を設 けるなど、より生徒が話しやすい、安心 できる学校を目指した取組みを考えて いきたい。	生徒対象調査 (7, 12月)	
						② 概ねできている 24%				
						③ 余りできていない 1%				
						④ 全くできていない 0%				
・スマートフォン等を 安全に便利に使用す る力を育成する	・生徒アンケートに基づく研修を通 じた共通理解と指導 (アンケート(7月実施)) (研修(8月職員会議で実施))  ・全教員による校内ルール徹底の指 導	生徒相談課	・「自分にとって危険である」 「自分にとって妨げになる」 といった意識を持ち、自制す る力を身に付ける必要があ る。	【成果指標】（教員） 生徒がスマートフォン等を自分で 正しく使う力が身に付けられるよ う指導した。	「危険が無いか、トラブルが起こらないか、自分の本来行 うべきことの妨げになっていないかを生徒自身が考えて、ス マートフォンやクロムブックを使用できるように指導し ている。」と評価した教員の割合（①+②）が  A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	① している 47%	B  82%	【分析】 「している」「概ねしている」がやや減 少し、「余り」が6%から18%に増加 した。適切な使い方ができていない生徒 への対応の仕方に対する共通理解が不 十分な点があったことが原因と考えられ る。 【今後の対応】 若手教員を中心に、なぜその指導が必要 か、どのように対応していけば良いかを ケーススタディの形で学ぶ研修の機会を 年度明けの早い段階(1学期中間考査 時)に実施する。	教員対象調査 (7, 12月)	
						② 概ねしている 35%				
						③ 余りしていない 18%				
						④ 全くしていない 0%				
					【成果指標】（生徒） スマートフォン等を自分で正しく 使う力が身に付いた。	「危険が無いか、トラブルが起こらないか、自分の本来行 うべきことの妨げになっていないかを考えて、ス マートフォンやクロムブックを使用している」と答えた生徒の割 合（①+②）が  A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	① している 75%	A  100%	【分析】 中間よりも良好な数値ではあるが、生徒 対象のアンケートからは、使用の仕方に 心配な点が見えてきている。 【今後の対応】 昨年末に生徒対象のアンケートを実施し たところ、SNSを介した交流、アプリ内 課金、肖像権の取り扱いなど、問題点 が見えてきた。同時に、教師側も新たな知 識を身に付けねばならない。2月にNTT ドコモのスマホ安全教室を実施したが、 来年度は、5月のPTA総会の際に保護者 対象に実施するなどし、家庭とも連携し た取組みを考えていきたい。	生徒対象調査 (7, 12月)
							② 概ねしている 25%			
							③ 余りしていない 0%			
							④ 全くしていない 0%			

・あいさつの習慣化 ・あいさつ運動（交通安全指導と同時に）の実施 ・登下校時の指導において、あいさつを励行する ・教員によるあいさつの率先垂範 ・社会生活と結びつけて、あいさつの必要性を指導する	生徒相談課 ・自己表出が得意な生徒と苦手な生徒との差が大きい。	<b>【成果指標】（教員）</b> あいさつを率先励行した。	「あいさつを率先励行している」と答えた教員の割合(①+②)が  A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	<table border="1"> <tr><td>①</td><td>している</td><td>76%</td></tr> <tr><td>②</td><td>概ねしている</td><td>24%</td></tr> <tr><td>③</td><td>余りしていない</td><td>0%</td></tr> <tr><td>④</td><td>全くしていない</td><td>0%</td></tr> </table>	①	している	76%	②	概ねしている	24%	③	余りしていない	0%	④	全くしていない	0%	A  100%	<b>【分析】</b> 中間より「している」が9%増加。年間を通じ継続的に取り組んだ成果といえる。 <b>【今後の対応】</b> 公民館で過ごすようになり、物理的な生徒間の距離が近くなった。より良い関係づくりのために、対教師・対地域だけではなく、家族間・生徒間の挨拶の励行についても取り組んでいきたい。	教員対象調査 (7、12月)
		①	している	76%															
②	概ねしている	24%																	
③	余りしていない	0%																	
④	全くしていない	0%																	
<b>【成果指標】（生徒）</b> 学校内外問わず、積極的にあいさつができる。	「学校内外問わず、積極的にあいさつができた」と答えた生徒の割合(①)が  A 50%以上 B 40%以上 C 35%以上 D 35%未満	<table border="1"> <tr><td>①</td><td>できた</td><td>76%</td></tr> <tr><td>②</td><td>概ねできた</td><td>24%</td></tr> <tr><td>③</td><td>余りできなかった</td><td>0%</td></tr> <tr><td>④</td><td>全くできなかった</td><td>0%</td></tr> </table>	①	できた	76%	②	概ねできた	24%	③	余りできなかった	0%	④	全くできなかった	0%	A  76%	<b>【分析】</b> 「余りできなかった」2名の生徒が0名になった。昨年度最終と比較しても13%増加している。 <b>【今後の対応】</b> 挨拶をする意義について生徒自身が考える機会をつくりたい。小中で行ってきた挨拶運動とはまた違った、高校生になったからこそできる気づきがあるはずである。何より、挨拶し合う中で、仲間と過ごす楽しさや安心感を生徒自身が肌を通じて感じる事が、挨拶が「あたりまえ」になるために必要であると思うので、それを大事にして取り組んでいきたい。	教員対象調査 (7、12月)		
①	できた	76%																	
②	概ねできた	24%																	
③	余りできなかった	0%																	
④	全くできなかった	0%																	
<b>学校関係者評価委員会の評価</b>	挨拶はコミュニケーションの基本である。日ごろの挨拶や「ありがとう」、「お願いします」と言えることの大切さを伝えてほしい。																		
<b>評価結果を踏まえた今後の改善策</b>	公民館で過ごすようになり、物理的な生徒間の距離が近くなった。より良い関係づくりのために、対教師・対地域だけではなく、家族間・生徒間の挨拶の励行についても取り組む。																		